

2010年 第59回目の長崎原爆の日平和祈念式典参加報告

2010年8月11日

東京都生協連 竹内誠

はじめに

今回の長崎訪問は、東京都生協連の今後の平和活動についてどのように考え、取組んでいくかの一つとしての視察としました。現在、東京都生協連の平和活動は、会員生協の参加をもとに平和活動担当者連絡会で検討・議論し、ピースセミナー、ピースアクションinヒロシマ行動や他団体と協力し4月開催のお花見平和のつどい、5月開催のピースアクションinTOKYOをはじめ、核兵器廃絶を願うNPT再検討会議への参加など多岐にわたった活動をすすめてきました。こうした取組み以外にも、沖縄平和の日、伊江島での平和の取組み、東京都平和の日、会員生協の平和の取組み等あり、今後の平和活動をどのように取組んでいくか検討することとし、今回長崎の平和記念式典への参加を行いました。今後、平和活動担当者連絡会でこうした内容について検討を重ね、今後の取組みを検討していくこととします。

1. 原爆資料館

原爆資料館の館内は、被爆者の写真や遺品、折れ曲がった支柱、11時2分で止まった時計、熱で溶けてしまったガラス瓶、原子爆弾(ファットマン)の模型、長さ3.25メートル、重さ4.5トン。この中にウランやプルトニウムはたった8kgしかなく、その中の1kgしか核分裂反応をしなかったそうです。1kgのウランやプルトニウムだけで、死者7万3千884人の命、7万4千909人の負傷者を出すほどの威力がある原子爆弾の開発から現在までの歴史など視覚に訴えるものが数々あり、大きな衝撃を受けました。



【資料館内部を見学する人】

2. 爆心地公園

原爆資料館のすぐ下に、爆心地公園がある。当日は労働組合などが参加する核兵器廃絶の集会が開催されていました。

爆心地公園には以下のような記録が書かれた碑がたっていました。

「原爆搭載機ナガサキへ」 長崎は深い入江に面した美しい港を中心に繁栄し、三方（東・西・北）を山に囲まれた複雑な地形とたたずまいの中に、ポルトガル船入港から原子爆弾投下にいたる370有余年の歴史を刻み込んだ、九州の最西端に位置する港湾都市であった。太平洋戦争の末期、1945年8月9日早朝、西太平洋マリアナ諸島のテニアン基地を飛び立った原爆搭載機B29「ボックスカー」号は、第1攻撃目標の北九州の工業地帯小倉市上空は焼夷弾による煙のため視界がきかず、第2目標であった長崎へと方向を変えた。長崎市上空へ侵入した「ボックスカー」号は、雲の切れ間に三菱長崎兵器製作所の巨大な工場群を発見、高度3万フィート（約9000メートル）から投下した原子爆弾は、午前11時2分、長崎市の北部、松山町の上空500メートル上空でさく裂した。

原子爆弾による被害状況

死者	73,884人	当時の推定人口約24万人
負傷者	74,909人	(以上死者・負傷者数は1945年12月末推定数)
罹災人数	120,829人	半径4キロメートル以内の全焼、全壊世帯数
罹災戸数	18,409戸	半径4キロメートル以内の全戸数、市内総戸数の約36%
全焼	11,574戸	半径4キロメートル以内、市内約1/3にあたる
全壊	1,326戸	半径1キロメートル以内を全焼とみなしたもの
半壊	5,509戸	半径4キロメートル以内を半壊とみなしたもの
消失土地面積	6.7km ²	



【慰霊碑の中心が爆心】



【全国から送られた千羽鶴】



【慰霊碑横にある天主堂レンガ】

3. 日本生協連主催 虹のひろば参加

8月8日(日)13時30分から、長崎市民会館で日本生協連、長崎県生協連主催の「虹のひろば」が開催されました。日本生協連山下会長が主催者挨拶をした後、ジャーナリストの高瀬毅さんによる『ナガサキ消えたもう一つの「原爆ドーム」』の講演が開催されました。その後保育園児による龍踊り、NPT代表団報告、岩田中学校合唱部の合唱が行われ閉会しました。



【田上長崎市長のあいさつ】

田上市長は挨拶の中で、生協の応援が支えになり、今年5月にニューヨーク国連本部で開催されたNPT再検討会議では、最終合意文書が採択されたこと、これを受けて世界的に核廃絶の機運が高まっていること。また、8月5日には、はじめて国連事務総長のパン・ギムン氏が長崎を訪れ、核廃絶は必ず実現できることを長崎市民に訴えたこと。加えて、今年の平和式典には、はじめてイギリスやフランスの代表が訪れることなどが報告され、今後も全国の生協に皆さんに協力をお願いしたいことなどが訴えられた。

その後開催されたジャーナリストの高瀬毅さんによる『ナガサキ消えたもう一つの「原爆ドーム」』の講演は、長崎の原爆投下により破壊された、「旧浦上天主堂」の廃墟の写真や天主堂にまつわる経過や取り壊しについての調査をもとに、広島には原爆ドームという可視化できる象徴があるが、長崎にはない。本当はこの旧浦上天主堂が残っていれば、世界に核兵器廃絶を訴えかけるインパクトある象徴になったのではないか。という報告がされ、12,500人の信徒のうち8,500人が亡くなられたという悲惨さ、世界のキリスト教徒はこのような実態をほとんど知らされてい

ないことなど、良く理解できる講演でした。

4. 旧浦上天主堂パネル展

「虹のひろば」が開催された長崎市民会館では、同日の同時間に「旧浦上天主堂パネル展」が開催されました。原爆投下時に天主堂は爆心地から 500m の位置にあり、被爆により悲惨な光景が生々しく残されていました。このときの写真を、長崎出身で自らも被爆した写真家の高原至さんが撮影し、「長崎旧浦上天主堂 1945-58 失われた被爆遺産」(岩波書店 2010 年 4 月発行)で初めて公開した写真パネルです。この写真をもとに、今年 4 月は発刊された『ナガサキ消えたもう一つの「原爆ドーム」』(著者 高瀬毅氏 平凡社)に記され、今回のパネル展の開催となりました。本来は、この遺産が残されていれば、世界各国のキリスト教信徒のみなさんにも共感を与えるとともに、被爆地長崎の象徴として今もこの地に存在していたはずでした。戦後、当時の市長はこの遺産を残すと明言していましたが、アメリカ訪問をすることによりその考えが逆転し、取り壊されるに至ったとのことでした。その後、長崎とセントポール市、広島とフィラデルフィアが姉妹都市として両市長との間で契約が締結されたそうです。このような話は初めて聞く内容であり、強く印象に残りました。高瀬さんの著書をよく読み、詳しくその事実を検証したいと思いました。



【被爆により傷を受けた聖像】 【被爆により黒くなったマリア像】 【破壊された天主堂に信徒集う】

5. 浦上天主堂見学

旧浦上天主堂パネル展見学後、浦上天主堂を見学しました。現在も長崎のまちにその存在感を示しながら建っている天主堂。旧浦上天主堂は明治時代以降 30 年をかけて建立され原爆投下により 1 日にして破壊されましたが、現在の天主堂は 3 年余りで完成したそうです。



【現在の浦上天主堂】

【入り口横にある被爆像】

6. 日本被団協長崎支部訪問

65 年前の 1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分、一発の原子爆弾で長崎はこの世の地獄となりました。死をのがれた人々の多くは今も原爆後障害や被爆体験のストレスによる健康被害で苦し

んでいます。被爆者の平均年齢は75歳と高齢ですが、皆さんは決して健康とは言えない方々であり、「命ある限り」と体を張ってこれからの日本・世界のために核廃絶運動を続けていらっしゃる姿を見て、本当に頭が下がる思いでした。平和への思い、核廃絶を願い、後世にこうした事実を語り継ぐため、ご自分の辛い経験伝え続けています。長崎県被団協事務局長の山田さんにご挨拶に伺いました。事務所入り口には全国から送られてきた平和へのメッセージが多数掲示されていました。この建物の1階には「被爆者の店」があります。印象に残っているのは「平和は願うものではなく、築きあげるもの」という言葉でした。



【長崎被団協事務局長山田氏（右）】 【入口には平和を願うメッセージが】 【平和公園内被爆者の店】

7. 8月9日原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参加

式典は、長崎工業高校の放送部員男女2人の司会で始まり、(爆心地に近く、全壊した)長崎市立山里小学校生徒による「あの子」を合唱、平和への誓い続いて田上富久市長が平和宣言があり、「密約で非核三原則を形骸化し、核拡散防止条約（NPT）未加盟のインドと原子力協定交渉を進める日本政府の対応を到底容認できない」と非難しました。非核三原則の法制化など、被爆国として国際社会でリーダーシップを発揮するよう求めたうえで、核廃絶に向けた取り組みでリーダーシップを取るよう日本政府に要請し、世界中の市民に連携を呼び掛けました。また2010年5月にニューヨークで開かれた核拡散防止条約（NPT）再検討会議で、核軍縮への具体的期限の設定に核保有国が反対したことを危惧され、核兵器の製造、使用など一切を禁止する核兵器禁止条約への支持を表明しました。その後、菅直人首相が就任後初めて出席しあいさつがありました。原爆投下時間の11時2分に黙祷を行い、亡くなられた方々への哀悼の意を表するとともに、参加者全員で二度とこのような惨禍を繰り返さないことを約束しました。

今回の長崎での平和祈念式典は、8月5日、国連の潘基文（パン・ギムン）事務総長が、現職の事務総長として初めて、被爆地の長崎を訪れたことが核廃絶にむけ市民の期待が示されていると強く感じました。



【平和祈念像】



【記念式典に参列するみなさん】

